

ドキュメンタリー 古川健

登場人物

高村吾一（たかむらごいち）・・・フリージャーナリスト

杉崎章（すぎさきあきら）・・・グリーン製薬営業社員 内部告発者

重岡郁夫（しげおかいくお）・・・小児科医 元グリーン製薬研究員

1985年1月、東京都内の狭いマンションの一室。マンションとはいえ生活感はあるではない。粗末なデスクと同じく粗末な応接セットがあるのみである。この物語はこの一室のみで進められる。

1 内部告発

部屋には一人の男がいる。男の名は高村吾一。フリージャーナリストである。応接セットに座っている。机の上には本や書類の束が山になっている。高村は難しい顔をして書類を読んでいる。しばらくして、デスクの上の電話が鳴る。（電話機は黒以外の色のダイヤル式が望ましい）高村、慌てて受話器を手取る。

高村 はい、もしもし。・・・あ、はい。高村です。今日はよろしくお願ひします。・・・はい、はい。・・・ああ、そうですか。何か目印になるものは・・・あ、それならもうすぐ近くです。その公衆電話から信号見えますよね？・・・その交差点を左です。・・・ちよつと行くとビデオ屋がありますんで、その二つ隣のマンションです。・・・はい、はい。・・・では、お待ちします。

高村、受話器を置く。少し緊張したように深呼吸をする。振り返って机の上に目をやる。やがて机に近づき、本の隣にあった小型のテープレコーダーを手取る。しばらくそれを眺めて、録音のボタンを押す。

高村 あー、あー。・・・昭和60年、1985年、1月28日。天候は晴れ。場所は例の仕事場。今日の取材相手は杉崎章氏。・・・グリーン製薬の営業社員。・・・そうあの

グリーン製薬だ。・・・エイズ・・・正しくは後天性免疫不全症候群。アメリカ生まれのこの病気が日本でも少しずつ知られるようになった。しかし、この病気の本当の姿が認知されるとはとても言えない。せいぜいが「アメリカの怖い病気」。そして「ホモの病気」というイメージでしかない。

高村、いったん話すのをやめる。大きなため息をついてまた話し出す。

高村　しかし、そのイメージは明白に誤りである。確かにアメリカで発病した人間にホモセクシャルが多いのは事実だ。しかし、それは100%ではない。である以上、エイズを「ホモの病気」と規定することは極めて危険なことだ。ホモセクシャルではない麻薬常習者にも発病者がいる。・・・それに日常的に血液凝固因子製剤を投与している血友病患者もだ。・・・私は医学に関しては全くの門外漢である。しかしながらアメリカにおける後天性免疫不全症候群発病者を並べて考えれば、「血液」が問題となっているということくらいは推測できる。・・・杉崎氏は日本の血液凝固因子製剤の市場において大きなシェアを持っているグリーン製薬の社員。そしてその血液製剤を病院に卸している張本人だ。・・・日本の血友病患者に何が起こったのか？そしてこれから何が起こるのか？・・・本来の私の目的からはずれるかもしれないが、しかし、私は一人のジャーナリストとして・・・

話している途中で、玄関チャイムの音がする。黙る高村。チャイムは神経質そうに続くなり続けている。高村、慌てて録音をやめ、玄関に向かい、退場。鍵を開け、ドアを開く音。

高村の声　杉崎さんですね？・・・どうぞ上がってください。

ドアを閉め、鍵を掛ける音。高村が杉崎章を伴って入ってくる。杉崎は落ち着かない様子で部屋のあちこちを見る。

高村　杉崎さん。

杉崎　(びくっとする) はい！

高村　(ポケットから名刺入れを取り出し) ジャーナリストの高村です。(名刺を杉崎に渡す)

杉崎　(受け取って) ありがとうございます。杉崎章と申します。(ポケットに手を持っていくが) あ・・・

高村　何か？

杉崎　(動揺しながら) すいません、ちょっと名刺の持ち合わせが・・・

高村 構いませんよ。お話を聞かせてもらえればどうでもいいことです。

杉崎 はい・・・

高村 内部告発するならそれくらい用心深い方がいいでしょう。

杉崎 ……すいません。

高村 いいえ。さ、お座りください。

杉崎 ありがとうございます。(座って、改めて名刺を見ながら)あの・・・

高村 はい。

杉崎 フリーの方なんですネ。

高村 はい。どうかしましたか？

杉崎 てつきり週刊木曜の記者さんが直接話を聞いてくれるものだと思ってました。

高村 ご心配なく。ちゃんとこの件は週刊木曜のデスクからの依頼で動いています。

杉崎 いや、心配しているわけでは・・・

高村 なかなか繊細な話題です。まずはフリーの人間を使って下調べをさせてみようという腹かもしれないですね。

杉崎 はあ・・・

高村 もしそうなら、ものになると踏んだら私は外されるかもしれませんね。

杉崎 え？それでいいんですか？

高村 もちろん良くはないですね。私もそれなりに思うところがあってこの件に首を突っ込みました。自分のペンで記事にしたい。だから、杉崎さん。

杉崎 はい？

高村 杉崎さんがひと言「高村にしか話さない」と言ってくれば編集部も私を外せません。もしもの時はそう言ってくれると助かります。

杉崎 ……はい。

高村 私もそう言ってもらえるように誠心誠意、取材させてもらいます。

杉崎 ……分かりました。

杉崎、小心そうに身をすくめ、うつむく。落ち着かない様子で貧乏ゆすりなどをする。高村は注意深くその様子を観察する。やがて杉崎をほぐすために軽い調子で話し掛ける。

高村 本来はこちらから出向くところをご足労いただいて申し訳ありません。

杉崎 いえ、こちらから頼んだことですから。自宅や会社の近くじゃ人の目が気になつて・・・

高村 もっともですね。

杉崎 ここは・・・高村さんの仕事場ですか？

高村 そうです・・・と言いたいところですが違います。先輩筋のライターに頼んで貸してもらいました。

杉崎 そうですか。

高村 私はまだ、自宅と別に仕事場を持てるような身分ではないですからね。自宅にお呼びしても良かったんですが、見苦しい独り身なもので。

杉崎 分かります。僕も独身時代はそうでしたから。

高村 ああ、ご家族をお持ちですか。

杉崎 はい。妻と息子が一人。

高村 お幾つですか？

杉崎 もうすぐ5歳になります。

高村 そうですか！可愛いでしょう？

杉崎 そうですね。仕事が忙しくてなかなかかまってやれないのが残念です。

高村 ご自宅は都内ですか？

杉崎 いえ、川崎市です。ちょっと無理して去年、家を持ちました。

高村 まだお若いのに立派ですね。

杉崎 いいえ、妻の実家に援助してもらったんです。

高村 ああ、可愛い孫の為にとってことですか。

杉崎 いや、向こうの両親はもう亡くなってるんです。ただ義理の兄が親身になってくれて。

高村 なるほど。・・・随分順調な人生ですね。私のような自由業の身からすると羨ましい

限りです。

杉崎 そんなことは・・・

高村 ・・・

杉崎 ？

高村 杉崎さん。

杉崎 はい。

高村 そんな幸せなあなたがなんで内部告発を？今の幸せを壊すことになるかもしれないよ？

間

杉崎 話さない方が良いというなら帰ります。

高村 そうじゃありません。私としてはあなたからグリーン製薬について話を伺いたいのです。ただ内部告発というのはいやほやり容易なことではありません。

杉崎 それは十分分かってるつもりです。

高村 私は取材する以上、相手が何を思っただけ取材に応じてくれるのかを知っておきたい。だから敢えて聞かせてもらいました。

間

杉崎 正直を言えば、今でも迷っています。自分で言うのもなんですが、僕は平凡なサラリーマンです。会社を裏切るなんて大それたことは考えたこともなかった。

高村 分かりますよ。

杉崎 僕は十分に現状に満足していました。欲を言えばきりがない。今自分の手にしているモノだけでも十分過ぎるほど幸福だと。

高村 ……

杉崎 (自嘲して) それ以上に僕は小心な人間です。自分が大それたことをするって考えただけで怖くてたまたらない。ご覧の通り、手の震えと貧乏ゆすりが止まりませんよ。

高村 気休めになるか分かりませんが…

杉崎 なんですか？

高村 私は情報元を守るのもジャーナリズムの義務だと思っています。そう望むなら、杉崎さんの名前を一切出さないようにすることも可能です。

杉崎 ……

高村 真実を報道することは確かに尊いことです。しかし、一人一人の小さな生活もまた尊い。その二つを秤にかけるようなことはしたくありません。

間

杉崎 お気遣いありがとうございます。

高村 残念ですが、日本人の感覚では内部告発は裏切りです。ですから我々はあなたを世間から守る義務がある。

杉崎 ……僕、首になってもかまわないと思ってるんです。

高村 え？

杉崎 もうあの仕事を続けてはいけません。

高村、杉崎の言葉に驚き、少し黙る。杉崎、淡々と続ける。

杉崎 僕は平凡な人間です。可もなく不可もない成績の営業社員。出世も早くもなければ遅くもない。…それでも僕にだって心はあります。会社に言われるがまま、危険な非加熱製剤を売り続けることには我慢ができません。

高村 ……

杉崎 グリーン製薬は医療に携わる会社として、最低のことをしている。危険を理解しながら、利益の為に非加熱製剤を垂れ流し続けているんですから…

間

高村 杉崎さん、覚悟を疑うようなことを言ってしまった。申し訳ありません。(頭を下げる)

杉崎 僕に覚悟なんてありませんよ。・・・それでも、もううちの会社には我慢ができません。

高村 お話を録音させていただいても良いですか？

杉崎 ……はい。

高村 私は医療のことに関しては詳しくありません。記事を読むであろう読者はなおのことです。私を何も知らない素人だと思ってお話をしてくださいと助かります。

杉崎 分かりました。そう努めます。

高村 では録音します。

高村、テープレコーダーのボタンを押す。机の上にそれを置く。緊張感のある沈黙が少し続く。

高村 それではまず、簡単に普段の仕事内容についてお聞きします。

杉崎 はい。

高村 杉崎さんはグリーン製薬の営業部に所属ということですね？

杉崎 製薬業界では営業のことをプロパーと呼びます。入社して十二年、プロパー一筋です。6

高村 なぜグリーン製薬に？

杉崎 内定ももらった会社の中で、一番大きな会社だったからです。

高村 なるほど。

杉崎 研究職でなければ、別に普通の会社です。僕も薬のことなんて入社するまで大して知りませんでした。

高村 製薬会社の営業・・・プロパーですか？具体的な業務内容は？

杉崎 僕の場合、一番の取引相手は病院です。自社製品を導入してもらえよう、大病院、個人病院、あらゆる病院に顔を出して先生と繋がりを持ちます。

高村 病院巡りが仕事ですか？

杉崎 そう言っていていいと思います。まずは先生に顔を覚えてもらいます。プライベートな話ができるようになったら一歩前進です。

高村 接待もある？

杉崎 もちろんです。普通の会社の営業が、取引先や親会社にするように、製薬会社は先生方を接待するんです。

高村 なるほど。苦労してきましたか？

杉崎 いや、僕は血液凝固因子製剤を主に営業してきました。この薬に関してはうちが大きなシェアを持っています。ですので新規参入のための苦労というのはありません。

した。

高村 すいません、血液凝固因子製剤というのは血友病の患者さんの為の薬ですね。

杉崎 その通りです。血液製剤とも呼ばれますね。

高村 まず血友病というのは？

杉崎 血液凝固因子、つまり血を固める因子を遺伝的に持っていないという病気です。

高村 血が固まらない？ということは止血ができない。

杉崎 そうです。

高村 では出血の結果が死に至る。

杉崎 うちの会社ではこう言ってます。「血友病は先天的に凝固因子が欠乏し、出血が止まらず死に至る病気」と。．．．しかし、どうやらこれは大げさな表現のようです。

高村 と言いますと？

杉崎 実際に治療にあたっては先生方に聞きました。通常の範囲の切り傷擦り傷では、簡単に普通圧迫で止血できるようです。重症の患者さんでも、ほとんど出血のない患者さんもおられます。

高村 では健常者と同じでは？

杉崎 そうとも言えません。内出血も止まらないので、打撲などでは関節内の出血が続いて、運動障害が起こるそうです。

高村 グリーン製薬はなぜ血友病を大げさに言うのですか？

杉崎 もちろん、患者さんに薬を沢山使ってもらう為です。非加熱製剤が流通するようになって、血友病のビジネスモデルが完成したんです。

高村 ビジネスモデル？

杉崎 はい。元はアメリカの先生が考案したやり方です。患者さんは日常的に血液製剤を使うことによって、病気を忘れて健康に生活できる。薬がどんどん売れることによって病院と製薬会社も潤う。これが血友病のビジネスモデルです。

高村 それが日本にも入ってきたと。

杉崎 日本の場合、医療保険制度があるので国が負担する形で、更に病院と製薬会社が儲かります。輸入される血液製剤は定価が高く設定されているので、会社としては安く売ることが可能です。そして病院はそれを定価で買ったこととして届け出る。そうすると差額がそのまま病院に入ります。

高村 誰にとってもおいしい話というわけですね．．．

杉崎 使えば使うほど儲かる薬です。先生方は喜んで処方します。患者さんがもういらないと言っても持って帰らせる。そんな話も聞きます。

高村 それが安全ならそこまで騒ぐ話でもないのかもしれませんが．．．

杉崎 本当にその通りです。でも、先生方は未だにこのビジネスモデルに固執しています。そしてグリーン製薬はそれをいいことに、非加熱製剤の在庫を何とかさばいてしまおうとして、更なる安売りをしているんです。

高村 医療に関してビジネスモデルという言葉には多少違和感を覚えます。

杉崎 …でもそれが現実なんです。僕も入社当時は医療で利益を追い求めることに違和感がありました。だけどそれが日常になってしまえば感覚は麻痺します。上は二言目には「営業なら売ってこい」と言います。企業である以上、利益の追求は当たり前のことなんです。・・・でもそれは、あくまで安全性を担保したうえで追及しなきゃいけない。

高村 そうじゃなきゃ危なっかしくて薬なんて飲めるもんじゃないですね。

杉崎 だけど僕の会社は、今この瞬間にも、危なっかしい非加熱製剤を日本中の血友病患者にばらまき続けている。

問

高村 では、その薬について聞かせてもらう前に確認したいのですが・・・

杉崎 はい。

高村 エイズというのはいわゆる伝染病ですよ？

高村 そうですね。エイズウイルスに感染することによって引き起こされる病気です。

高村 なるほど・・・

杉崎 しかし感染力自体は弱いウイルスです。空気感染も飛沫感染も起こりません。

高村 ではどのような経路で感染するんですか？

杉崎 血液です。

高村 血液・・・

杉崎 感染者の血を輸血すれば感染します。他にも性行為や、注射器の使い回しも感染の原因になります。

高村 性行為も原因になりますよね？

杉崎 もちろんです。粘膜どうしの接触で、そこからわずかな傷が付けば感染が起こります。特に男性同士の性行為は粘膜の傷が異性間のそれより起こりやすい。だから最初期にホモのグループでエイズが広まったのです。

高村 そういうことだったんですね。では血友病の患者にエイズが発生したというのは？

杉崎 血液凝固因子製剤の原料は人間の血液です。アメリカの場合、原料用の血液を製薬会社がお金を払って買うんです。・・・血を売る人ってどういう人だと思います？

高村 …それはお金に困っている人ですね。

杉崎 そうです。そして血を売る、生活に困ったグループというのは、エイズが最初に広まったグループと重なるんです。

高村 つまり原料用の血液にエイズウイルスが混入してしまった・・・

杉崎 そういうことなんです。そして非加熱製剤というのはそういうウイルスへの対策を取っていない薬です。だから血友病患者にエイズが広まってしまったんです。

高村 その薬について細かく聞きます。非加熱製剤とはどういういきさつでできた薬ですか？

杉崎 ……血友病の治療法の歴史から説明してもいいですか？

高村 もちろんです。助かります。

杉崎 ごく簡単に説明します。血液凝固因子を持ってない患者には、外部からそれを投与するしかありません。1970年までは輸血しかその方法がありませんでした。しかし70年に凝固因子を取り出した薬が開発されました。これをクリオと呼びます。これは一人か二人、少人数の血液から作られるので危険はありません。しかし大量生産もできません。

高村 なるほど言ってみれば手作りの薬というわけですか？

杉崎 そうイメージしてもらってもいいです。その欠点を補うために濃縮製剤が開発され、78年から日本でも使われるようになりました。これは二十人から二十万人の血液を一か所に集めて、凝固因子を抽出して作られる薬です。

高村 二十万人！

杉崎 それだけの血液を日本で集めるのはコストが掛かり過ぎます。だから日本では、アメリカからの輸入品か、アメリカから血液を輸入して製造したものが使われました。

高村 それが非加熱製剤。

杉崎 はい。

高村 わざわざ非加熱と表現するということは加熱製剤もあるということですよ？

杉崎 そうですね。エイズが発生する以前から、輸血や血液製剤によって肝炎に感染するケースが多くありました。肝炎は血友病と切っても切り離せないと言われていた時期があったんです。その予防の為、製造過程で熱を加え凝固因子を生かしたままで殺菌する加熱製剤が誕生しました。

高村 ……なるほど。

杉崎 ここが大事な点なんです、エイズという新しい病気の予防にも、どうやら加熱製剤は有効なようです。

高村 それなら加熱製剤に切り替えない理由がありませんね。

杉崎 そうです。そしてアメリカでは一昨年3月に加熱製剤が認可されました。エイズを恐れるアメリカの血友病患者は加熱製剤を使っています。でも、厚生省はいまだに加熱製剤を認可していません。その結果、日本国内ではいまだにアメリカの血液で作った非加熱製剤が使われているんです。

高村 アメリカで使われているということは、すぐにも輸入できるといことですよ。

杉崎 もちろんそうです。すぐにでも認可を出して、非加熱製剤は全て回収するべきなんです。それをしなければ感染が広がるのは明らかなのに。

高村 ……

杉崎 確かに会社の薬を売ることが僕の仕事ですよ。でもだからと言って、危険な薬をなん

で平気な顔をして売れますか？冗談じゃない。いくらなんでもそんなことはできませんよ。

高村 他の営業の方はどう感じているんですか？

杉崎 何も知らされていないんです。そして、会社の言うことを頭から信じ込んでいます。僕はこっそり調べたんです。ばれたら辞めさせられるでしょうね。

高村 調べただけで？

杉崎 ええ。そういう会社です。薬を売ることに疑問を持った営業は必要ない。望むところですよ。・・・未練はありません。

高村 少し疑問なんですが。

杉崎 为什么呢？

高村 アメリカで認可されている加熱製剤の認可に時間がかかるのはなぜですか？

杉崎 海外で認可が下りている薬でも何段階かの実験を経なければ認可は下せないことになっていきます。ただ、緊急性を考えてそのうちのいくつかの過程は免除するという特別な処置もあり得るんです。だけど厚生省はそうはしない。

高村 それはなぜ？

杉崎 ・・・グリーン製薬の加熱製剤がまだ開発されていないからです。

高村 ・・・え？

杉崎 信じられますか？信じられませんよね。僕だってそうです。・・・だけど、これはおそらく事実です。

高村 でもグリーン製薬が認可の時期を決められるわけではないですよ？

杉崎 それがグリーン製薬の恐ろしいところなんです。

高村 というと？

杉崎 うちは、こと血友病の血液製剤に関しては主導的な立ち位置を確保しています。まあ、つまりは金を使っているということなんです。

高村 どういうことですか？

杉崎 エイズに関しては一昨年83年に厚生省が専門家の委員会を立ち上げました。血友病治療で指導的な地位にある医者の方が委員会に集まったんです。

高村 ええ。厚生省としては当然の処置ですね。

杉崎 ですが顔触れに問題があります。委員長は清京大の安倍川猛医学部長。そして委員の多くは安倍川教授の弟子の先生方でした。

高村 委員のメンバーに何の問題が？

杉崎 安倍川という先生は長く血友病治療に関わってきた方です。つまりその長い時間、グリーン製薬とも付き合いがあるということですよ。

高村 つまりグリーン製薬の意のままに動く？

杉崎 その通りです。そもそも、さっき話した血友病のビジネスモデルを日本に持ち込んだのもうちと安倍川教授なんです。つまり患者さんにジャンジャン非加熱製剤を使う

ように指導してきた張本人が安倍川先生なんです。そして病院も製薬会社もそれで大儲けをした・・・

高村 癒着構造というわけですか。

杉崎 もちろん厚生省だってその構造の一部なんですよ。

高村 ……天下りですか？

杉崎 はい。もう何代も重役には厚生省の元お偉いさんに天下ってもらってるんです。つまり厚生省へのパイプは完璧に繋がっているわけです。

高村 厚生省と製薬会社と医学界の癒着ですか。(苦笑) 完璧ですね。怖いものなしだ。

杉崎 患者団体にだってうちは手を出してますからね。だから当事者の団体である患者会すら危機が起こるまでは声を上げることすらなかった。

高村 ……そして一人一人の人命が軽視されてきたということなんですか？

杉崎 (無言で肯定)

高村 (ため息) なんとも空恐ろしい話ですね・・・

杉崎 突発的な事態が起こらなければ、癒着にも業界全体の安定という大きなメリットはあるんです。必要悪と言ってもいい・・・僕もそう思っていました。しかし・・・

問

高村 このエイズ。後天性免疫不全症候群という新しい病気の発生に対しては、業界の癒着が最悪の事態を生んでしまったと・・・

杉崎 あんな病気が誕生することは予想できなくても仕方ないとは思いますが・・・まあ、もし自分が感染したらそんな悠長なことは言えないでしょうが。

高村 そうですね・・・

杉崎 しかし、アメリカで血液製剤による感染が疑われた段階で、もっと採れる策はあったはずなんです。アメリカからの血液輸入を禁止し、加熱製剤の完成まではクリオでしのごこともできました。現にそう対応している国は沢山あります。対応の早かった国ではいまだに感染者ゼロなんですよ。

高村 血友病患者へのエイズ被害は天災ではなく人災なんですな。

杉崎 せめてアメリカで加熱製剤が認可された83年に、日本でも加熱製剤を導入するべきでした。そうすればかなりの割合で感染を防げたはずですよ。しかし、会社は大量の非加熱製剤の在庫をさばくために加熱製剤にストップをかけた。医者には患者に対して、「非加熱製剤は安全です」と言い続けた。厚生省は医者と会社のやることには何も言わない。

高村 ……

杉崎 ……そして防げたはずのエイズが血友病患者の中で蔓延してしまった。

高村 感染がどの程度広まっているかはいまだに報道されてませんね。

杉崎 これは噂なんですけど・・・安倍川教授が清京大病院の血友病患者さんを検査したら、なんと40%が陽性、つまりエイズウイルスに感染していたそうです。

高村 40%!

杉崎 ……これが僕達のしてきたことの結果です。僕には・・・到底受け入れられない。なんで・・・なんでこんなことが・・・

間

高村 本当に血友病患者の40%がエイズに感染したら大変なことになりますね。

杉崎 はい。恐らく後数年です。血友病患者は自分たちが騙されていたことを悟り、医者と製薬会社と厚生省を責めるでしょう。そうなれば社会現象にもなります。恐らくグリーン製薬と安倍川先生は社会的な制裁を受けることになると思います。

高村 当然そうなるでしょうね。

杉崎 しかし、そうなるってからではもう自分を守れないんです。その時じゃなく、今、非加熱製剤をやめなければいけないんです。・・・だけど、日本人は医者の言うことを鵜呑みにしてしまう。医者が非加熱製剤は安全だと言えばそれを信じてしまう。

高村 ……確かに、日本人は医者の言うことは疑いませんね。

杉崎 でも今こそ、一人一人の患者さんが非加熱製剤の危険性に気が付かなければいけない。医者に逆らっても非加熱製剤は使わないと、自分で判断して欲しい。

高村 内部告発の動機はそれなんですな。

杉崎 はい。・・・もう悲劇は避けられないでしょう。きっと数年後には数千人単位の感染者がグリーン製薬を呪うことになります。彼らは僕達を人殺しと罵るでしょう。それは当然のことです。しかし、今非加熱製剤をやめれば、感染を防げる人がまだいるはずです。たとえ一人でも二人でもいい。新たな感染を防ぎたい。だからこそ、マスクミに取り上げてもらって、世間の注目を血友病患者に集めたい。そう考えたんです。とてもご立派な判断だと思います。なかなかできることじゃない。

杉崎、力なく首を横に振りうなだれる。沈黙。

杉崎 信じてもらいたいんですけど、僕はこれが贖罪になるとは考えてないんです。

高村 ……

杉崎 もし・・・僕の子供が血友病だったら・・・僕は自分のこの手で子供に非加熱製剤を注射したかもしれない。そして・・・感染させていたかもしれない。

高村 杉崎さん・・・

杉崎 僕は我が子を思う親御さんに毒を手渡しました。少なくともその片棒を担ぎました。お子さんがエイズを発病した後、親御さんはどれほど自分を責めるでしょう・・・

高村 ……

杉崎 僕達のしたことは、絶対に絶対に許されることじゃない。許されちゃいけないんです。

間

高村 杉崎さんのお気持ちは察するに余りあります。……一刻も早く記事にして、非加熱製剤の危険性を世に訴えましょう。安倍川達を信じちゃいけないと患者さんに気付いてもらいましょう。

杉崎 (頭を下げる)……ご協力、お願いします。

高村 もちろんですよ。ベストを尽くします。

杉崎 はい……

高村 ちょっと一息いれましょうか。

高村、レコーダーのスイッチを切り。立ち上がってわざと体を伸ばす。

高村 杉崎さん、何か飲みますか？

杉崎 いえ、大丈夫です。

高村 そうですか。

間

杉崎 高村さん、一つ聞いてもいいですか？

高村 はい。

杉崎 思うところがあってこの件に首を突っ込んだって言っていましたね？

高村 ええ、言いましたね。

杉崎 つまりエイズに関心があったということですか？

高村 ……そうですね。そう言っても間違いではないと思います。

杉崎 しかしあなたは医療関係には疎いようです。

高村 ええ、まったくの門外漢です。

杉崎 ではどうしてエイズに関心を持ったんですか？世間的にはまだまだ認知されてない病気です。……まあ、あと数年もしたら誰もが知ってる病気になるでしょうけど。

高村 ……私の友達がアメリカでエイズに感染したんです。

杉崎 え？……本当ですか？

高村 ええ、本当です。もう色々併発しているそうです。何とか肺炎とか、何とか肉腫……

杉崎 カリニ肺炎とカポジ肉腫……。典型的なエイズの症例です。

高村 もうそうなると長くはないんでしょうね。私にはよく分かりませんが。

杉崎 ……その方は日本人ですか？

高村 そうです。日本人の…同性愛者です。いわゆるホモってやつですね。

杉崎 ……

高村 私、これでも元々は誰でも知ってる新聞社の記者だったんです。彼、仮に山本君ってしましょう。山本君とは新宿の歓楽街の取材の時に知り合いました。気持ちのいい奴でした。ウマが合ったんですよね、取材した後もよく飲みに行く友人になりました。

杉崎 ……

高村 あ、私は同性愛者じゃありませんよ。

杉崎 あ、いや、それは別に…

高村 いいです、慣れてます。ホモセクシャルの問題を扱っていると、よく言われるんですよ。「君もホモなのか？」…その根底には結局差別意識がある。

杉崎 ……すいません。

高村 あ、別に謝ることじゃないです。こっちこそすいません。

杉崎 いえ…

高村 山本君は偉い奴だったんです。勇気のある男だった。

杉崎 勇気？

高村 世間の偏見と真っ向から戦ってたんです。ホモの何が悪いって。

杉崎 ……

高村 もちろん親兄弟からは勘当されて、友達も何人も離れていったそうです。残念ですが、それがこの国の同性愛を取り巻く状況です。

杉崎 ……それで山本さんはアメリカに。

高村 まあ、そういうことです。自分らしく生きられる新天地を求めて…そして、エイズになった。

杉崎 ……

高村 私、同性愛差別をなくしたいと思ってました。山本君のような人が胸を張って生きていける社会にしたいって。だからことあるごとに同性愛差別を報道する企画を提出しました。そしたら、社の中で「あいつはホモだ」って噂になって、会社を辞めることになったんですよ。

杉崎 それは…お気の毒に…

高村 今となってはフリーの方にやりがいを感じています。生活の為にあれこれ書いてますけど、本当にやりたい仕事も少しずつ進めていますから。

杉崎 エイズもその流れで…

高村 ええ。そもそも「ホモの病気」ってことで知りました。でもホモセクシャルだけの病気ってことが科学的にはあり得ない。だって同じ人間なんですから。

杉崎 もちろんそうです。最初期の段階でホモのグループ内で病気が発見されたというだけのことです。

高村 このままその誤ったイメージが定着したら、同性愛者とエイズ感染者双方にとって、重大な印象被害が起こります。そして科学的に正しいことは無視されて、差別だけが助長される。

杉崎 それを防ぐためにはエイズを正しく報道するしかない。

高村 そうです。それが私の目的です。

杉崎 ・・・・高村さん。

高村 はい。

杉崎 厚生省によれば建前上、まだ日本にはエイズ患者はいないということになっていません。

高村 ・・・・現実には血友病患者に蔓延している可能性があるのにですか。

杉崎 はい。去年、一昨年と二人、東京の血友病患者さんがエイズに非常に似た症状で亡くなりました。しかし厚生省はその二人をエイズとは認めませんでした。

高村 それを認めれば、自分たちの責任を問われることになるから。

杉崎 そうです。

高村 なんとなくこの件の本質が分かってきた気がします。

杉崎 病気が発生している以上、いつまでも隠しておけるものじゃありません。近いうちに厚生省は日本でのエイズの発生を認めるでしょう。でも恐らく第一号は血友病患者以外から選ぶはずですよ。

高村 例えば同性愛者・・・

杉崎 はい。

問

高村 仰りたいことは分かりました。厚生省は同性愛者を人身御供にするつもりなんですね。つまり「ホモの病気」という誤った認識をそのまま国民に植え付けたい。

杉崎 日本人のエイズ認定は大ニュースになるでしょう。そして同時にホモの病気と大多数の国民が自然と思うようになる。数万人しかいない血友病患者の存在は、一億二千万人の大騒動の陰に隠れてしまいかねないんです。

問

高村 取材中に感情的なことを言うのは良くないと思ってるんですが・・・。利益と保身。基本的にそればかりだ。生命の尊さとか医学の倫理とかはどうなってしまってるんでしょう。

杉崎 エイズに認定されなかった患者さんは清京大の安倍川先生の患者さんだったそうですよ。これは聞いた話ですが、先生は自分の患者さんのエイズが認定されなかったこと

を残念がったそうです。

高村 何故ですか？

杉崎 日本におけるエイズ第一号の発見という名誉を得られなかったからです。

高村 ……その患者さんは血友病の治療の結果エイズに感染した可能性が高いはずですよ
ね？それなら血液製剤を与えた医者者の責任です。

杉崎 はい。

高村 つまりはその患者さんをエイズにしたのは安倍川だ。

杉崎 安倍川先生はそうは思っていないでしょうね。不運にも血友病患者だったから感染
したとでも思ってるのかもしれない。

高村 それでその人がエイズに認定されたとして、一体、何が名誉なんですか？そんな名誉
がありますか？……まったく理解できません。

杉崎 僕もです。先生方の考えていることがまるで分からない。なぜ「非加熱製剤は安全だ」
と言い切れるのか？なぜ「慌てて薬を変える方がリスクが高い」と言い切れるのか？
……先生方もうちの会社も厚生省も、人の命をなんとも思っていないとしか思えない
んです。

重い沈黙。杉崎はうなだれる。高村、しばらく考えて口を開く。

高村 杉崎さん。これはグリーン製薬だからこうなったと言えるんでしょうか？それとも

日本医学界全体の問題なんでしょうか？

杉崎 ……実はよその製薬会社は今、治験という名目で加熱製剤を病院に卸しています。

危険な非加熱製剤は売るわけにはいかないと判断したそうです。正直、正しい判断だ
と思います。

高村 しかしグリーン製薬はそうはしない。

杉崎 はい。非加熱製剤の在庫を全て捌くために躍起になってます。……それが僕の会社
なんです。

高村 ……杉崎さん、一つお願いがあります。

杉崎 なんですか？

高村 私、グリーン製薬についてもっと突っ込んで知りたくまりました。どうも会社の体質
そのものに異質な感じます。

杉崎 はあ……

高村 会社の創業はいつ頃ですか？

杉崎 一九五〇年です。最初は民間の血液銀行として創立されたそうです。

高村 血液銀行というと売血ですか？

杉崎 そうですね。今は赤十字の献血で輸血用血液が賄われていますけど、20年くらい前ま
では売り買いされてたんです。

高村 …… 例えませんが、その頃を知っている社員さんで、今は退職して会社とは距離のある方とかからお話を伺えないですか？

杉崎 創業の頃ですか……。三〇年以上前のことですよ……

高村 しかし、その頃の若手とかなら……

杉崎 そうですね……

高村 きつとそういう方を取材出来たら、よりグリーン製薬の本質に迫る記事になると思います。

杉崎 …… 分かりました。一人だけ心当たりがあります。ちょっと連絡してみます。

高村 ありがとうございます！

電話機のベル音。照明が暗くなる。別のスペースに白衣を着た小児科医重岡郁夫登場する。見るからに穏やかな人柄であり、口調も丁寧である。

重岡 (受話器を取り上げ) もしもし。重岡小児病院です。…… ああ、杉崎君。久しぶりですね。…… ええ、おかげさまで元気になっていますよ。…… 杉崎君はどうですか？ お子さんもだいぶ大きくなったでしょう？ …… そうですか。それは良かった。…… それで今日は？ お仕事の話ですか？ …… え？

しばらく黙って杉崎の話を聞いている。一度、受話器を顔から遠ざけ小さくため息をつく。再度受話器を持ち直し。

重岡 驚きましたね。あなたからそんなことを頼まれるとは思ってなかった。…… いえ、お引き受けしますよ。…… ええ、もう昔を知ってる人はみんな死んでしまった。私で良ければ話しますよ。…… そう。昔の話をね。

照明が変わる。

2 731部隊の遺産

二日後の夜、同じ部屋だが薄暗い。冒頭と同じように高村が応接セットに座っている。やがて机の上のレコーダーを持って立ち上がり、薄明かりの差し込む窓際でレコーダーに話しかける。

高村 昭和60年、1985年、1月30日夜。天気は晴れ。今夜は一昨日の杉崎章氏と、かつてグリーン製薬に研究員として勤務していた重岡郁夫氏の二人から話を聞く。医者、製薬会社、そして厚生省。この三者によって血友病患者にもたらされた薬害に

よるエイズ感染。その主導的な位置を占めるグリーン製薬という会社の本質に迫りたい。

高村、机の上に重ねられた資料から一冊の文庫本を取り出す。森村誠一著「悪魔の飽食」。角川文庫版。

高村 この部屋を借りている先輩にお礼がてら話の内容を聞いてもらった。先輩は何も言わずこの本を貸してくれた。それがこれ「悪魔の飽食」だ。著者は小説家の森村誠一氏。出版は四年前。知ってはいたが読んではいなかった。今回初めて読んで驚いた・・・もし読んでいたら、もっとグリーン製薬についてピンときたかもしれない。

本を机に置き、見つめる。

高村 関東軍防疫給水部。通称731部隊。旧満州ハルビン郊外のピンファンに広大な研究施設を持っていた、旧日本軍の秘密部隊。細菌戦実験、毒ガス実験、凍傷実験。そして生体解剖。軍事医学の発展の名の下に、3000人の人間がその実験の犠牲になった。犠牲者はマルタと呼ばれ実験の材料とされ、誰一人生きて出ては来られなかった。

本を手に取り、ポケットに入れる。

高村 この恐るべき死の部隊にいた医学者は多くが戦後を生き延びた。病院、研究所、そして製薬会社。何事もなかったようにエリートとしての人生を全うした。三年前に他界したグリーン製薬の創業者内田紘一もその一人だという・・・

部屋全体が明るくなる。ちょっととした時間経過。既に応接セットには杉崎と重岡が座っている。重岡、穏やかな笑顔で高村に話しかける。

重岡 それで、私は何を話せばいいんですか？

杉崎 重岡先生は5年前まで社の研究員をされてました。

重岡 今はしがない開業医ですけどね。

高村 早速お伺いします。

重岡 ええ、どうぞ。

高村 グリーン製薬にはいつ入社されましたか？

重岡 会社ができた時に、社長の内田さんに拾ってもらいました。まだ東洋ブラッドバンクという名前でしたね。

杉崎 内田さんって元会長の・・・

重岡 そうですよ。亡くなった内田紘一元会長です。

高村 では創業メンバーというわけですね。

重岡 でも、みんな死んじやいましたね。内田先生も、最高顧問の南野先生も。他の諸先輩方も亡くなりました。唯一ご存命の今井先生もこの前手術をしたそうですね。

杉崎 顧問の今井先生ですか？確かガンでご入院されてるとか・・・

重岡 知ってますよ。研究員時代は直接の上司でしたからね。

高村 創業時を知っているのはもう重岡さんだけということですか？

重岡 そういうわけでもないんですけどね。ただ、私がここで何をしゃべっても叱る人はもういないかなあと思うわけですよ。

高村 私はグリーン製薬という会社に何か異質なものを感じています。

重岡 どういうことですか？

高村 杉崎さんには血液製剤の薬害に関するお話を伺いました。

重岡 ああ、あれねえ。私、辞める前に会長に気を付けるように言っただけですけどねえ。

杉崎 そうなんですか？

重岡 不特定多数の血液で作られた薬ですよ。危険があってもおかしくない・・・ま、内田先生は聞き流してましたけどね。非常に残念です。

高村 自社の利益至上主義、それにことが起こってからの責任逃れ。病院と厚生省を巻き込んだ癒着構造。正直どれも信じがたい話です。

重岡 うーん、そうですね？会社って言うのはどこだって利益を一番大事にするでしょう。利益を守る為には根回しして味方を作るでしょ？都合の悪いことの責任は誰かになすりつけるでしょ？会社だけじゃない、人間の集団ってのはたとえ国だって同じようなものです。グリーン製薬だけが特別ひどいということはないですよ。

杉崎 確かにそうかもしれません。それでも普通の会社は売り物で人を殺しはしません。

重岡 ・・・・うーん、まあそうかもしれないですね。でも倫理と現実はいっ対立してもおかしくない。そして人間は往々にして現実的な選択をして倫理を捨てる。これは普遍的なことであって、グリーン製薬だけの問題ではありません。

杉崎 先生、それは苦しい言い逃れですよ。現実には罪は罪として存在しているんですから。

高村 ・・・・私も杉崎さんの意見に賛成です。

重岡 杉崎君、勘違いしないでください。私は私でそういうのが嫌になって会社を辞めました。まさかうちが悪くないなんて言う気はないんですよ。ただグリーン製薬だけが狂っているわけじゃないって言いたかったんです。

杉崎 ・・・・

高村 ということは、先生ももうグリーン製薬に勤めてはいらないと思ったきっかけがあったんですね？

重岡 ・・・・そうですねえ。30年勤めましたけど、なぜか会社の汚い所ばかり見させられた気がします。色々、見て見ぬ振りもしたし、他人の尻拭いだってさせられましたよ。

私は、内田先生には逆らえなかったから。

高村 先生の見た、会社の汚い所についてお聞かせ願えませんか？

重岡 ……

高村 お願います。

重岡 さつきも言った通り、偉い先生方はみんな死にました。

高村 はい。

重岡 だからお話ししましょうか。せっかく杉崎君が呼んでくれたことですしね。

高村 ありがとうございます。

重岡 (考えながら) どういうことをお話したらいいのかなあ……。まあ内田先生の話をしましょうか。

高村 お願いします。

重岡 内田先生は経営者でしたけど、本質的には研究者のままでした。その先生が生涯を懸けた研究が人工血液です。

高村 人工血液？

重岡 読んで字の如く、本物の血液の代替として輸血に利用できる液体です。

高村 なるほど……

重岡 内田先生も私も軍医でしたからね、やっぱり軍事医学としては失血死を防ぐものが必要なんです。現実には、先生のご存命のうちには実現しませんでしたね。恐らく今後数十年は研究が必要な課題です。それだけ人体の仕組みというのはよくできているのです。

高村 ではまるで実用化はしなかったということですか？

重岡 いや、それがそうでもないんです。完全な代替品は難しくても、輸血の代わりに急場をしのげるものはいい線まで行っていました。杉崎君、覚えてませんか？ちょうど7年位前のことです。

杉崎 はい。確か内田会長自らが人工血液の実験台第一号になりました。新聞報道もされませんでしたよね。グリーン製薬会長の体を張った医学への貢献って。

重岡 (ニコニコしながら) 直接内田先生を知ってる人間ならあんなこと信じるわけないんですけどね。あの人が自分を第一号になんかするわけない。

杉崎 どうしてそう思うんですか？

重岡 だって自分が実験台になったら観察できないじゃないですか？徹頭徹尾研究者だったんですよ、あの人は。

高村 ではその報道はグリーン製薬の嘘。

重岡 もちろんそうです。だって私や他の社員が因果を含められて、実験台になったんですから。

二人 (絶句)

重岡 まあ、死ぬことはないと思ってましたけど、さすがに不安でしたね。ああ、被験体で

のはこういう気持ちなのかってねえ。

高村 本当の第一号は重岡先生だったんですか？

重岡 いえ、違います。本当の第一号は容態の思わしくない末期がん患者のお婆さんでした。高村・・・そのお婆さんはグリーン製薬の関係者ですか？

重岡 違います。そのお婆さんの担当医と付き合いのある重役が、担当医を騙して使わせたんですよ。「危険はないから急場の輸血の代わりに使ってみてくれ」と言ったそうです。そしてそのお婆さんは病状を悲観して手首を切った。担当医は慌てて血が届くまでの急場しのぎに人工血液を使ったそうです。あれは内田先生が実験台になる三カ月くらい前のことだったと思います。

杉崎 お婆さんはどうなったんですか？

重岡 ひと月後、自殺ではなくガンで亡くなったと聞きましたよ。だから人工血液自体は死因になってない。私は投与される前にそう説明を受けました。

高村・・・ちよつと整理させてください。

重岡 どうぞ。

高村 実験台の第一号として、内田元会長が人工血液を投与されたと報道された。つまりグリーン製薬としては、そう発表した。

重岡 はい。

杉崎 それは僕も知っています。

高村 しかし、現実には重岡先生をはじめ数人のグリーン製薬関係者があらかじめ実験台になった。

重岡 対象は私のような最古参か、裏切る恐れのない幹部連中でしたね。

高村 そしてその更に前、末期がん患者に投与されていた。

重岡 その通りです。さすがに動物実験だけしかしてないものを幹部に投与するわけにはいかなかったんでしょうね。

杉崎 でもそれを臨床で使った先生はそのことを知らなかったんですね？

重岡 名前は言えませんが、評判の良い先生ですよ。知ってたら使わなかったでしょうね。杉崎・・・先生はなんでそこまで知ってるんですか？

重岡 私ね、内田先生から直接頼まれたんですよ。どこかの病院を騙してこっそり人工血液を試してこいって。

杉崎 本当ですか？

重岡 先生とは腐れ縁ですからね。まあ、無茶なことを頼まれたもんですよ。

高村 引き受けたんですか？

重岡 断りました。私、研究者でしたからね。人を騙すのは仕事じゃないんですよ。代わりに自分を実験台にしてくれて言いました。そしたら本当に実験台にされちゃったんでちよつと笑っちゃいましたよ。

杉崎・・・笑えませんかよ、先生。

高村 では人工血液は別の人が病院に？

重岡 ええ、営業畑の幹部が私的に仲の良かった医者を買収したんです。・・・ひどいことさ
せませすよね。友達を買収させたんですから。

杉崎 でも先生。先生はそんな頭のおかしい話を聞いて平気だったんですか？

重岡 もちろん不快でしたよ。いつまでこんなことやってるんだって思いました。前々から
辞めようと思ってましたけど、辞表を出したのはこのことがきっかけですね。まあ、
内田先生が諦めてくれなくて、辞めるのに二年かかっちゃいましたけど。

高村 諦めるとは？

重岡 言ったでしょ？腐れ縁なんです。私は知らなくても良いことを山ほど知っているん
ですから。

高村 似たような話は他にも？

重岡 もちろん。・・・そうですね、買血の事故で死者が出た話をしましょうか？

高村 お願いします。

重岡 確か1973年のことだったんで、もう12年以上前のことです。

杉崎 僕が入社する前の話ですね。

重岡 ああ、そうですね。まだその頃はうちも薬の原料の血を買っていたんです。採血所の
ことをプラントって呼んでましたけど、大阪のプラントで事故があったんです。血を
売りに来た日雇い労働者が死んでしまったんですよ。

高村 それは、どうして？

重岡 プラントの看護婦がミスをしたんです。採血とは言え欲しいのは血漿だけです。成分
を分離して血漿以外はまた元の体に戻すんです。ところがね、若い新米の看護婦がこ
れを取り違えた。違う血液型の血を点滴して体内に入れてしまったんです。そんなこ
とをしたらもちろん人間の体は壊れます。

二人 ・・・

重岡 鼻負目なしに、プラントは治療には全力を尽くしたと思います。すぐに専門病院に運
び、人工透析で何とかしようとした。しかし、力及ばずその労働者は死にました。そ
の後処理をしたのが内田先生です。

高村 後処理というと？

重岡 このことが世間に知れたグリーン製薬全社員が路頭に迷う。内田先生はそう言っ
てました。つまりは隠蔽したんです。

杉崎 そんなことができますか？

重岡 もともとプラントにも偽名を使って血を売りに来るような男です。そしてその金で
酒を飲む、典型的なトヤ街の男でした。だからプラントで体調を崩してそのまま亡く
なったことにしたんですよ。・・・本名も分からなかったから、結局は無縁仏になり
ましたね。

高村 ・・・死亡診断書はどうしましたか？

重岡 今でも忘れませんよ。私と内田先生二人で、その男が死んだ病院に行きました。

高村 なんて重岡先生まで行かれたんですか？

重岡 どういうわけか、そういうことに私はよく付き合わされました。だから腐れ縁なんです。表向きはプラント関連の主任研究員として行きましたけどね。

高村 それで病院ではどんなお話を？

重岡 分かるでしょ？こっちの筋書き通りの死亡診断書を書いてもらったんです。

高村 医者はそのらの話を呑んだんですか？

重岡 ええ、苦い顔はしてましたけど、結局は言うことを聞いてくれました。

高村 にわかには信じ難いのですが・・・

重岡 脅しと利益。これで大概の人間は言いになりますよ。大事なのは両方使うことです。片一方だけではうまくいかない。

高村 脅しというのは？

杉崎 それは分かります。多分、薬を卸さない、今ある物も引き上げると言えばいいだけです。きつと人工透析関連の商品をうちが入れてたんでしょう。

高村 しかし他社製品はあるでしょう？

杉崎 入れ替えには大変な労力がかかります。

重岡 そうですね。コンピューターや電磁弁の再調整で二、三日は完全に病院の機能が止まるでしょう。それは現実的じゃない。だから言いなりになってくれるんです。

杉崎 ……ひどい脅しです。許されることじゃない。

重岡 しかし内田先生にも会社を守るという大義名分がある。それに見返りは払ってるんですよ。今でも論文の掲載料という名目で毎月いくらか振り込まれ続けているはずですよ。

高村 警察は診断書を疑うことはしないでしょう。事件ではなく、ただの病死として扱われるはずですよ。

重岡 そうですね、その通りの展開になりました。

高村 それに立ち会った時は、どんな心境でしたか？

重岡 ……もちろん、良い気持ちはしませんよ。どんな事情があっても、相手がどんな人間でも、事故を起こしたのはグリーン製薬なんです。それを隠蔽するべきではない。内心ではそう思っていました。

高村 でもその気持ちを発言することはなかった。

重岡 ええ。内田先生には逆らえませんか。

高村 グリーン製薬という会社にとって、内田元会長というのはそんなにも大きな存在だったんですか？

重岡 とにかくあの会社は内田先生の会社です。その組織としての体質の隅々にまで、先生の影響があります。亡くなってもそんなに変わってないんじゃないですか？

杉崎 ……そうだと思います。だからあんな危険な非加熱製剤を平気で使わせるんです。

重岡 経営者というより研究者って言いましてけど、考えてみたら経営者としてだっただけでもんだったかもしれないですね。ここまでなりふり構わず利益を追求する組織を一代で作り上げたんですから。

杉崎 ……しかし、医学の倫理はどうなってしまうんですか？医療行為ってというのは人命を扱う崇高な行為なんじゃないんですか？それに携わる当事者が、そのことを忘れては駄目なんじゃないませんか？

重岡 他人事のように言いますけどね、君もグリーン製薬の商品を売って歩いてるじゃないですか。それで生活しているじゃありませんか？

杉崎 ……それはその通りです。

重岡 ここまで話をしたら気が付きませんか？そんなものはどこにもないんですよ。

杉崎 ……どこにもない？

高村 先生、それはどういう…

重岡 あまりに話を全体化すると語弊があるかもしれませんが、でも少なくとも、あの内田紘一先生の作った会社に医学の倫理なんてあるわけがないんですよ。あの人は…まあ私もそうですけどね、そんな窮屈な理屈の存在しないユートピアから日本に帰ってきたんですから。

沈黙。高村、ポケットから「悪魔の飽食」を取り出し、机の上に置く。重岡、その本が何か気が付くが、変わらず穏やかな笑顔。

高村 関東軍第731部隊。それが先生の言うユートピアですか？

問

重岡 正式名称は関東軍防疫給水部ですけどね。しかし、その通りです。今日ほもっと早くその話になると思ってましたよ。昔の話というからてっきり731のことだと思っ
てました。

高村 ……すいません、私はこの分野は専門外でしたので。「悪魔の飽食」を読んだのも初めてでした。

杉崎 ちょっと待ってください。話が読めないんですけど？

高村 先生…
重岡 グリーン製薬っていう会社はですね、色濃く731部隊の遺伝子を継承している会社なんです。

杉崎 731部隊って…あの人体実験の…

重岡 ご存知でしたか…これもその本のおかげですかね。今になって731が有名になるとは思いませんでしたよ。しかし、本当のところは731は大きなネットワ

ークの一部に過ぎなかったんですけどね。

高村 ネットワーク？

重岡 まあでも、そのネットワークを代表する部隊が731であったことは確かですね。杉崎君、731というのはペスト菌を始めとした細菌戦兵器の研究機関です。しかし、細菌戦にとどまらず、ありとあらゆる軍事医学の研究が行われていました。その過程で生きた人間を使った人体実験を繰り返していた。

高村 遺伝子を継承というのはどういう意味です？

重岡 グリーン製薬創業の主だったメンバーは、ほとんどが部隊の創立者石井四郎閣下の息のかかった医学者でした。内田先生は閣下の右腕と言われていました。最高顧問の南野先生は軍医中将として閣下の次に部隊長を務めた方です。

高村 旧満州で暗躍していた秘密部隊。グリーン製薬の発展の影には731部隊が存在するんですね？

重岡 一点、訂正しましょうか。暗躍なんてしてません。

高村 え？

重岡 秘密部隊であったことは事実です。しかし、当時の医学界では常識でした。この本を読むとですね、まるで誰にも見つからないところにエリート医学者が集まって、よそではできない人体実験を繰り返していたって印象を受けますでしょう？

高村 ……はい。

重岡 でもそれは事実ではない。いいですか？東大も京大もね、お偉い先生方は技師として、731にどんどん優秀な若いお弟子さんを送り込んで人体実験をさせました。ハルビンにはいろんな先生方が内地の大学から入れ代わり立ち代わりやってきて、自分の研究を進めては帰っていった。だからそれは医学界として公然の秘密だったんです。それにハルビンの本部だけに収まっていたわけでもないんです。

高村 そうなんですか？

重岡 満洲はもちろん、中国各地、それに東南アジア。防疫給水部の名目で、各地に支部が作られていました。そして、その支部を統括していたのが東京戸山の軍医学校内にあった軍医学校防疫研究室。当時、三研とか防研とか呼んでました。内田先生なんかはそこですべての支部の研究を取りまとめていたんです。そして東京とハルビンを行ったり来たりしていた。

高村 それが大きなネットワーク？それこそ日本医学界全体を巻き込む大きなものだったということですか？…つまり人体実験は日本医学界の総意だった。

重岡 そういう時代だったんです。もちろん、眉をひそめていた先生はいるんですけどね、表だってそれを批判する人はいなかった。あの当時は敵性の捕虜を使って軍事医学を発展させることは正義だったんです。

杉崎 正義？

重岡 例えば九州大の医学部教授なんか、731の真似をして墜落したB29の乗組員を

生きたまま解剖したんです。ほら、遠藤周作が「海と毒薬」って小説にもした・・・
杉崎
（高村を見る）

高村 ええ、学生時代に読みました。

重岡 まあ、小説には書いてませんでしたが、モデルとなった教授なんかは731の研究
成果を確実に意識していたと思いますよ。代用血液として海水を試したなんて話も
聞きました。まあ、ハルビンでやっていたことと比べたら、子供のいたずら同然の
拙い研究ですけどねえ。

高村 日本の医学界にそれをよしとする風潮があったということですか？

重岡 そうです。そしてそれがほんの40年前の話です。そして敗戦後、アメリカに研究成
果を全て提供することを条件に731の研究者は一切の罪に問われることはなかつ
た。内田先生なんかは随分タフな交渉をアメリカ側としたそうですよ。おかげで戦後
生き延びた私達はそのままだ日本の医学界で生き続けているわけです。

高村 ……だから倫理なんて存在しない。

重岡 考えてもみてください。あそこではね、医学者は自分の研究の為に、やりたいことが
なんでもできたんですよ。だって、本物の生きた人体を使ってどんな実験だってでき
たんです。学究の徒にとってそれがユートピア以外のなんですか？ハルビンの本部
には3000人からの日本人が働いていました。が軍医や軍属として研究の中核を担
っていた医学者はごく一握りです・・・そういう先生方はね、私から見るとホクホ
クしながら研究をされてましたよ。それぞれの抱える研究に没頭されてました。

杉崎 ……狂ってる。そうとは思えません。

重岡 杉崎君、若いですね。人間はね、倫理なんて簡単に超越しちゃうんですよ。特にね、
知的好奇心っていうのは怖いですよお。

杉崎 （重岡の言葉におびえる）

高村 重岡先生。

重岡 はい。

高村 先生も研究に没頭されていたんですか？

重岡 ……

高村 どうですか？

問

重岡 私はまだ若かったんです。あそこに行ったのはまだ見習い軍医の頃だった。だから自
分の研究を持っていたわけではないんです・・・だから731の日々は苦痛でした。
でも私、陸軍の金で医学校を卒業させてもらった身でした。ただただ耐えるしかあり
ませんでしたよ。まあ、信じてくれとは言いません。

間

重岡 さつきちょっと名前の出た今井先生。私は最初、あの先生の下につきました。

高村 会社の顧問で現在入院中と仰ってましたっけ？

重岡 そうです。戦後もグリーン製薬に來ただけあって、あの先生も血液がご専門でした。ごくたまに朝、当番兵にこう仰るんです。「今日は二本分お願いします」。意味分かりますか？

高村 ……ちよつと分からないですね。

重岡 私も最初は分かりませんでした。当番兵についていつて分かりました。一本二本ていうのはマルタの本数だったんです。

杉崎 マルタ？

高村 ……マルタというのは被験者のことですよね？

重岡 森村誠一さんのおかげで有名な言葉になりましたよね。そうです、実験台にする為はどこからか集められた生きた人間のことでですよ。中国人、満洲人、それに白系ロシア人も多かったですね。

高村 つまり実験の為に二人連れてこいという意味ですか？

重岡 惜しいですね。今井先生が欲しいのは血液です。生きたまんまの体なんていららないですよ。

高村 ……

重岡 マルタを生きたまま馬鹿でかい遠心分離器に入れて、思いっきり回します。その後、血をありったけ抜くんです。マルタは搾りかすみたいになって死ぬ。…さすがにあの光景は今でも夢に見ますね。他にも散々酷いものを見たはずなんですけど…

間

重岡 今井先生はね、それは穏やかな先生でしてね。内田先生は色々あくの強い人ですけど、今井先生のことを悪く言う人はいません。一見すると虫も殺せないような紳士なんですよ。

高村 何が仰りたいんですか？

重岡 人格なんて関係ないんです。医学者って生き物はね、目標を設定されて、手段を与えられたらなんでもやっちゃうんですよ。戦後って言ってもね、この国の医学界の頂点ではそういう人達が力を握り続けていたんです。巧妙に姿を隠していましたけどね。……なんで今になって731が騒がれるか分かりますか？

高村 真実が語られるのには時間が必要だったということでしょうか？

重岡 主だって睨みを聞かせていた人間がみんな死んだからです。だから今になって証言が開始めた。結局はそういうことなんだと思います。私だって内田先生が生きていた

らこんな風に話したりはしません。

高村 戦後40年、死んだ彼らは逃げ切ったということですか・・・

重岡 ソ連に捕まった一部を除いて、幹部はのうのうと戦後40年を生き延びた。3000人以上のマルタを切り刻んだその手を隠したままでね。そんな国の医学界に倫理を期待する方が間違ってると思いませんか？

問

杉崎 ふざけないでください。それは戦争中の話でしょうか？今はもうそんな理屈は通りませんよ。一般の人間は医療に倫理を期待しています。その行為を尊いものだと期待しています。人間一人の命は重いです。それを研究とか利益とか、そんなものと引き合いにしちゃいけないですよ。

重岡 ……もちろん、分かりますよ。それが正論です。

杉崎 そりゃ医者だって製薬会社だって仕事です。利益が出なきゃやっていけない。でも、それでも、命に対する尊敬を失っちゃ話にならないですよ。グリーン製薬も、医者の方先生方も、厚生省も命に対する尊敬がなさすぎるんです。

重岡 ……安倍川君は確か海軍の軍医だったのかな。でも彼のやり口は、戦前を知っている医学者のそれですね。まあ死んだ先生方と比べたら遥かに小物ですけど。

杉崎 高村さん、重岡先生・・・僕の甥っ子が実は血友病なんです。

高村、重岡、それぞれ驚きを無言で表す。

杉崎 良くしてくれている妻の兄の一人息子です。だからアメリカで血友病患者にエイズが発生したって聞いた時から他人事じゃなかった。

高村 それで、ご自分で色々調べたんですね。

杉崎 はつきりしたことが分かるまで、血液製剤、とくにうちの非加熱製剤は絶対に使わないように義理の兄を説得しましたよ。

重岡 それはいいことをしましたね。医者に逆らう覚悟があれば、クリオも加熱製剤も何とか手に入るでしょう。

杉崎 おかげで主治医からは見放されたそうです。非加熱製剤を使わないならもう来るなあって・・・最低の医者です。

高村 それも癒着構造の結果なんですね。皺寄せは常に弱い立場の患者にくる・・・

杉崎 僕、思ったんですよ。もしその医者の子供が血友病だったら、同じことが言えるのかって。同じことが言えないなら、その医者やっつては滅茶苦茶です。

高村 ……そうですね。

杉崎 大事なのは想像力なんです。想像してみたら分かるんです。僕は情けないことに、

身内に患者がいてやっと分かりました。重岡先生、なんでこんな簡単なことを頭のいい先生方が忘れてしまうんですか？僕にはそれが分からない。

問

重岡 (ニコニコしたまま) 邪魔だからですかねえ。

杉崎 ……え？

重岡 医学っていうのはどこまで行っても科学でしかない。科学というのはつまり、論理と効率の世界です。例えば未知の細菌や毒物を解析するのに想像力は必須です。でもね、それはあくまでも人間としての想像力とは別物です。むしろ科学的な思考を突き詰めるなら、対象はマテリアルであると捉える方が有効です。

高村 マテリアル・・・材料。人間を人間として認識しない・・・

重岡 どうして私達が生きたまんまの人間を実験の為に切り刻めたのだと思います？相手を人間だと思っていたら、そんなことはさすがにできませんよ。あの時、私の目の前にいたのは人間の形をした材料。マルタだったんです。

二人 ……

重岡 純粹に科学的な成果を求めるなら、相手の素性も事情も関係ありません。それがどうかしましたか？そう答えざるを得ない。

長い沈黙。高村、杉崎、重岡に対して底知れぬ恐怖を覚える。高村、何とか立て直し、口を開く。

高村 確かに科学とはそういうものかもしれませんが。しかし、今のようなことを本気で考えるなら、我々の間には共通する規範が何も無いということになります。我々は、互いの命は等しく尊いという大前提の元に、こうして社会生活を送っているはずですよ。

重岡、初めて笑顔を消して黙り込む。

高村 重岡先生？

重岡 あなたの言う通りです。私は壊れてるんでしょうね。言い訳しますが、自分が間違っていないなんて思ってますよ。

高村 はい・・・

重岡 戦争に負けて、ハルビンから内地に逃げ帰って。5年後、今井先生と一緒に内田先生に拾われました。それからはずっと会社の命じる研究を続けてきました。ある時ね、気が付いちゃったんですよ。

高村 何に？

重岡 実験が思うようにできない現状にイライラしている自分です。いつのまにか73
1と現在を比べて、イライラしてるんです。それに気が付いた時、会社を辞めたいと
心から思いました。・・・実際に行動に移せたのは別の件があったからでしたけど
ね。・・・でも結局は辞めても同じでした。

高村
・・・・・・・・

重岡 小児病院を開業して、まあほとんどは風邪の子供ですけど、ごくまれに診断の難しい
症例もあります。その時、思っちゃうんですよ、「ああ、内臓を見たらすぐに分かる
かもしれないの」ってね。

杉崎 (別の生き物を見るかのように重岡を見ている)

重岡 杉崎君、自分がおかしいってのは自分で分かってるんです。結局私は、人間を人間と
して見られなくなってしまったんですね。だから結婚もしませんでした。自分が家族を
作るなんて考えられなかった。だってこの手で自分の子供を抱くことなんてできま
せんよ。私達はいくつの子供だろうがマルタなら殺しましたからね。

杉崎
・・・・・・・・

重岡 この40年、毎朝目が覚めた時、ここがハルビンの731じゃないと気が付いてほっ
とします。・・・きつと死ぬまでそう思い続けるんでしょうねえ。

高村 こんな言い方がふさわしいか分かりませんが、重岡先生も戦争に、731に人生を破
壊された一人なんですね。

重岡 (笑顔を取り戻し)それを認めるわけにはいきませんよ。私はこの手でメスを握って、
マテリアルを・・・生きた人間を解剖したんですから。

間

重岡 (異様な雰囲気です)ああ、なんだか色々思い出していますね。一人の女
マルタがね、解剖されてる最中に目を覚ましたんですよ。びっくりしましたねえ、あ
れは。腹を真っ直ぐにかっさばかれてるのにその女は騒がなかった。一言だけ中国語
で何か言って死にました。

高村
・・・女は何て？

重岡 (首を横に振って)私、中国語分かりませんから。

高村
・・・そうですか。

重岡 (頭を抱えうめき声を上げる)

杉崎
・・・先生？

高村 大丈夫ですか？

重岡 嘘です。分からなかったってことにしたかったです。中国語が分からなくても、本
当は何て言ってるかすぐ分かりました。だってその女珍しい子連れのマルタだった
んですから。

二人 ……

重岡 …… 簡単な答えです。「私は死んでもいい。子供だけは助けてくれ」あの女マルタはきつとそう言った。

杉崎 先生、その子供は…

重岡 もちろん殺しましたよ。だって、あそこはそういう場所だったから。

問

重岡 (平静を取り戻し) 731から出てきた時、私はもう人間ではなかったんでしょね。だったらもう、ほかの先生みたいに自分は悪くないって思えば良かったのかもしれないません。

杉崎 …… 先生。そんなことはありません。先生は立派な方です。

重岡 何を言ってるんです？私の話聞いてましたか？私はあそこで…

杉崎 (遮る) それでもです。あれは仕方なかった。自分は悪くないって思える方がおかしいんです。僕はそう思います。

重岡 甘いなあ、杉崎君。人間はね忘れたいことは忘れられる。自分に都合の悪い記憶は書き換えられる。そういう生き物なんですよ。

杉崎 そうかもしれません。でも僕はそうしたいとは思いません。人間として、自分のしたこと。してきたことと向き合いたい。

高村 …… 血液製剤のことですか？

杉崎 (頷く)

重岡 我々がかつてしてきたことに比べれば、遙かに罪は軽いことなんですがね。

杉崎 比べる意味がないんです。だってこれは、一つしかない生命に関する問題なんですから。

重岡 なるほど、そうですね。確かにそれはそうかもしれない。命は誰にだって一つしかない…

杉崎 重岡先生がずっとそうされてきたように、僕も非加熱製剤を売りさばいたという十字架を一生背負って生きていかなければいけないんです。

重岡 …… 私にそれをどうこう言う資格はありませんね。

高村 重岡先生、杉崎さん。

二人 ?

高村 血友病患者とエイズの問題。731部隊と生き延びた医学者の問題。うまく言葉にできませんが、この二つは同じ根っこで繋がってるように思います。

重岡 …… そうかもしれませんね。

杉崎 医学に携わる者の倫理の破綻。僕はそれが本質だと思っています。

重岡 正しい理解だと思いますね。…あれからずっと我々には立派な倫理観なんて存在

しなかった。

高村 ……お二人の勇氣ある証言があれば、これからの日本社会にとって大きな意義のあるルポルターージュが書けると思うんです。

二人 ……

高村 この国の医学界は何をどの段階で間違い始めたのか？そして、どうしてそのことを修正できずにここまで来てしまったのか？今、そのことをはっきりとしなければ、いつまでたってもこの国の医療は変わらない。私はそう思います。

間

高村 薬害によるエイズと731部隊。お二人が見てきたその真実を記事にさせてもらえませんか？そこから何かが変わる。私は今、そう確信しています。……私もジャーナリスト生命をかけて取り組みます。どうか協力してください。（頭を下げる）

間

杉崎 高村さん。仰っていることはよく分かるつもりです。ですが、僕の目的は前回言った通り、一日でも早く、一人でも多くの血友病患者が非加熱製剤の危険性に気が付いてくれることです。あまり時間はかけたくないんです。

高村 もちろん、そちら関係の発表は急ぎましよう。週刊木曜のデスクに掛け合ってできるだけ早く掲載してもらえるように全力を尽くします。それとはまた別に、じっくりとお話を伺いたいです。

杉崎 そういうことでしたら、喜んで協力します。

高村 ありがとうございます！（握手を求めめる）

杉崎 （握手に応じて）社内でもっと情報を集めてみますよ。

高村 助かります。

高村、杉崎の視線が自然と重岡に向く。

重岡 731で見たことは墓場まで持っていけ。もしも秘密を漏らせば地獄まで追いかける……

高村 それは？

重岡 部隊が解散した時の石井閣下の命令です。いや、我々全体の合言葉と言っても良いでしょう。私達はひたすらそれに従ってきた。

高村 ですが……

重岡 ええ。やっとその呪縛が解けつつあるんでしょうね。石井閣下も内田先生ももういな

い。

高村 今からでも、先生が見たものを記録に残すべきだと思います。

間

重岡 お二人は満洲の光景を知っていますか？

高村 いいえ・・・

杉崎 (首を振る)

重岡 今は知りませがね、あの当時は見渡すばかりの大草原でした。まあ、住んでいた人は日本軍が追い出したんですけどね・・・その大草原のど真ん中に高圧電流を流した高い塀が延々と続いているんです。そして広い塀の中には飛行場さえあった。死体を焼くための焼却炉のひとときわ高い煙突。お化けみたいな二本煙突のあるボーラー室。真ん中にはドーンと大きな口号棟のビル。その中にはマルタを収容する特別監獄がありました。私は結局、今でもあそこにいる・・・ずっとそう思いながら生きてきましたよ。

杉崎 先生・・・

重岡 もうそれは致し方ない。自業自得なんです。私の人生は何も変わることなくこのまま終わるのでしょうが、この記憶が何かの役に立つなら、最後に少しくらい命令違反をしても構わないのかなあ。

高村 ありがとうございます。(握手を求めて)必ず、意義のあるルポルタージュにします。犠牲者の鎮魂の為にも。

重岡 (握手に応え)私は科学者ですからね、死んだ人のことは気になりません。でも、より良い未来の為になることを願います。

高村 はい。

暗転。しばらくして電話のベルの音。しばらく鳴り続ける。

エンディング

舞台が明るくなる。数日後、応接セットに高村と重岡だけが座っている。やがて高村が受話器を取る。

高村 もしもし・・・杉崎さん！何かあったんですか？・・・え？今、なんて？・・・
ちよっと待ってください！・・・杉崎さん！杉崎さん！

高村、茫然とするがやがて力なく受話器を置く。

重岡 杉崎君、どうかしましたか？

高村 ……

重岡 高村さん？

間

高村 杉崎さんがやはり取材は受けられないと…

重岡 ……急用が入ったというわけでもなさそうですね。

高村 はい…私達が出会ったこと自体を忘れてくれと。

重岡 全て無かったことに、というわけですか…

高村 あれだけ急いでいた血液製剤の問題も記事にはしないでくれと。

高村、力なく座り込む。沈黙。

高村 信じられません。高い志を持った人だったのに…

重岡 ……藪の蛇を突っついてしまったのかもしれませんがね。

高村 どういう意味ですか？

重岡 ……グリーン製薬は…怖い会社です。

高村 ……

重岡 40年経った今でも、この国には731のような何かが生き続けている。そういうことなのかもしれません…

沈黙。重岡、立ち上がる。

重岡 どうしますか？二人で続けますか？

間

高村 また必ずご連絡します。今日のところは…

重岡 (大きなため息)…分かりました。いつでも構いません。待ってますよ。

高村 ……ありがとうございます。

重岡、退場。高村、頭を下げてそれを見送る。高村、沈み込んでいるが、やがてレコーダーを取り出して力なく、録音を始める。

高村 昭和60年、1985年、2月3日。全てが振り出しに戻ってしまった。・・・昨日、

朝日新聞の友人と話ができた。朝日では安倍川教授の亡くなった患者がエイズであったことをすっぱ抜くつもりでいるらしい。この記事は、日本全体に大きな騒動を起こすことになるかもしれない。・・・だがその騒動が果たして本当に責任を取るべき者を的確に追い詰めるだろうか？・・・きっとそうはならないだろう。敵はこの日のあることを予想して、巧みに責任の所在をうやむやにする準備を整えているのだ。そして、重岡先生の言う731のような何かは生き続ける。・・・私はそれを妨げたい。私はいつか、このペンの力で731部隊の遺産を葬り去る。・・・血友病患者も同性愛者も、生きとし生けるすべての人間の命は等しく尊い。・・・私はそれを信じる・・・

高村、暗い顔でレコーダーを置く。舞台が暗くなる。

終